

槐

かい

岡井省二創刊

平成30年11月号

平成三十年十一月一日発行 第二十八巻第十一号 通巻第三二九号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



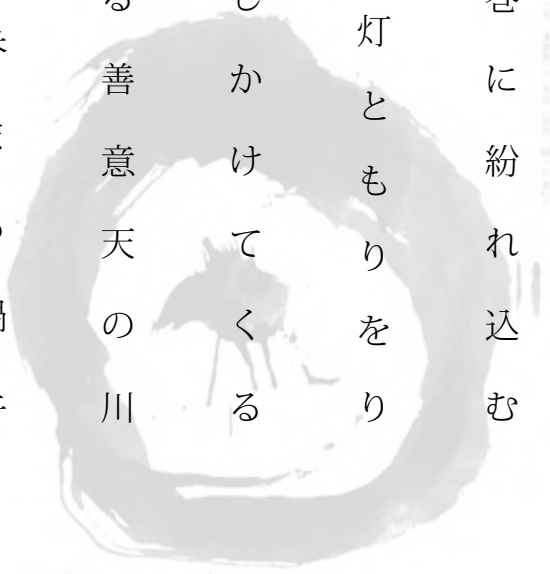
だんだん

高橋将夫

だんだんに本気になつて木の实降る
乱れ萩嵐のせいではなかりけり
粗密とはかういふことか踊の輪
螿螂は太つ腹なり小顔でも

原爆忌寄せ書きになき余白かな
文化の日宇宙に知的生命体
蟋蟀が源氏絵巻に紛れ込む
夢の世に狐の提灯ともりをり
風の盆仏が話しかけてくる
被災地に集まる善意天の川
泥流に家ごと呑まる蝸牛

「俳句界」九月号より二句



槐安集

水野恒彦

秋虹の環の中に消え虚舟とす
幻想交響曲となる紅葉谿
大空へ星を流して虚空とす
火の一語欲しくて白曜木めらるに近づけり
秋終る地球の廻る音しづか

加藤みき

秋風を待ちわびてをり今生ぞ
蚯蚓鳴くだんだんさうと思ひたる
炎天下の自衛隊員拝みたし
馬追の過つてゐたる奥座敷
明らかにお世辞なりけり秋暑し

中島陽華

通し鴨オノコロ島を鼻先に
白豪の裾に生れてや夏祓
くらがりを父が提げ来る金魚かな
にぎり飯月光に置く葬の家
葛水や形見の数珠の珊瑚玉

竹内悦子

骨壺や八月に咲く石菫の花
もの言ふに声のありけりジギタリス
吊皮や女三人の羅衣
熊蟬の腹なり六波羅密寺かな
すつぽん大会句のエキス舐めをる黄帷子きかたびら(



雨村敏子

金色えんじきの空蟬に波鑑真忌
盆菓子の五色を並べ風迎ふ
少年の喉佛美し桃の種
鬼灯の水絶ちしより紅深む
ラピスラズリの色深まり夜の秋

本多俊子

まなじりへ滑り込みたる蛇の影
露しぐれ鏡の中の小宇宙
秋来ると大樹の下に深息す
おおぞらをわれに残して雁帰る
みどりごの落ちてきそそうな百日紅

近藤喜子

鳥渡る天地もつとも澄みしとき
高空の青まとひたる秋気かな
いささ群竹さはさはと雁渡し
ありのまま見せれば我も虫鬼灯
すすき野や風の静けさ聴いてをり

瀬川公馨

パリ祭の海鳴りきいてみたりけり
玉蟲や大いに君を讃えたき
うれうれのプラム熟女の匂ひかな
百日紅二十人のチンパンジー
夕焼の色の洪水止めむと

柳川 晋

このところ土用の丑の日が二回
白帝の白を刷きたり今朝の雲
言霊の幸はふ空の流れ星
朝顔の恣なり空の瑠璃
風鈴や古人はものを思はざる

熊川 暁子

滴りの光押し出す音色かな
アルキメデスと仲良くしてる浮き西瓜
をどりの輪天の岩戸へつづきけり
蚊のこゑのなき夏の世の恐ろしき
稲の花誰に会うても故郷かな

寺田 すす江

黒揚羽影の纏れてゆきにけり
きちここの清すがし人間老いやすく
なんとなく意地張り通すカンナの緋
白桃を剥けばいのちの溢れけり
銀色のきらきら撥ねて初秋刀魚

岩下 芳子

台風一過残りの風の荒荒し
うねりつつ遙かより来し土用波
堂堂と発禁本を曝したる
毛虫焼いて毛虫の魂の漂へり
遙かより火星近付く夜の秋

有松洋子

清濁を海は選ばず出水さへ
この土偶飢饉の秋を幾度見し
一ト部屋に家族集まり待つ野分
手に遊ぶ二つの胡桃三鉢めく
蜉蝣の風へと変はる命かな

岩月優美子

フルートの音色に似たり秋の水
秋蝉や振り絞りたる生せいの声
秋刀魚焼く混沌の世の煙かな
銀翼を掠め星の流れたり
一抹の不安拭へぬ唐辛子

近藤紀子

来し方の軌跡見え見えなめくぢり
涼風のまつすぐに来る辻に立つ
庭下駄の一步に鳴きやむ昼の虫
盆の月聞き忘れたること多し
一輪の十葉を挿し足りてゐし

竹中一花

月鉾や彼のとなりがに女ぢがをる
夜の秋山裾の灯も火の文字も
汗の首鳥獸戯画の猿走る
咽喉越しのぶぶ漬急げ大文字
百度踏む祈りの空に青時雨

前田美恵子

頃合ひを計りかねたる秋の蝶
復活の兆しありけり虫の声
青北風や島の狛犬尾を立てて
川舟を繋ぎ止めたる芋嵐
ぶだう棚すこんと風の抜けてをり

中田禎子

曼荼羅を拝し真白きかき氷
飛び石に灯火ひとつ端居かな
狐面並ぶ参道とこゝろてん
素菱鳴の天駆け巡る揚花火
もののけの映る盃夜の秋

吉田順子

底紅に幾たりありや偲ぶ人
赤蜻蛉すいと思案の途切れたる
色に出て芙蓉は酔を深めけり
いつしかや木陰濃くなる秋の蟬
人恋の色かもしれぬ濃りんだう



槐市集

荻布 貢

竣工娘夫婦の新居を祝つて二可の終のすみかも秋涼し

秋澄むや新居の挨拶両隣
頬かすめすぎゆく風や秋の声
カラオケの鍛へし喉や夜の秋
撤退の白物家電九月尽

久保夢女

ひまはりに後ろ姿のありにける
夕立や壁に此の身をあづけをり
片羽を残してありし蟬の葬
涙する男眠らせ月見草
朝風や竜宮城より便り来る

古賀恵子

秋暁の影の不思議さ森の中
霧晴るるやいそいそ登る雄山まで
木造の長き廊下や風涼し
夏鴉ふいに笑うて飛び立てり
曼珠沙華睡魔襲うてをりにける

阪倉孝子

紅さして今日の始まり花木槿
晩夏光井戸に放ちし声返る
やうやくに五体つながり涼新た
日は西に沸騰したる蟬時雨
天の川釣竿の父亘りくる



柴田靖子

秋の神ゆるりと背にのりうつり
秋めきて命の息吹どこそこに
秋の日の海の波間に遊びぬし
やすらぎと少し淋しさ虫の声
釣瓶落し光芒しかと残しゆく

庄司久美子

書家の命毛白かりき初紅葉
舌つたらずのままごとや秋麗
地獄谷を走り抜けるや秋の虹
新涼やまた目をつぶる塀の猫
秋の蜂ポストかすめて失せにけり

杉原ツタ子

つけ髭の男二人や夏の陣
来世も語る二人の秋暑かな
合掌す蓮の影の水面にも
腕めくるまだ白きと秋の暮
大寺の底紅せかす川音かな

高野昌代

カサカサと飛ばされてゆく蟬の殻
浜風浜風に翔平雄星も何夏戦なに
学び舎はとつぷり暮れて月を待つ
新涼ややたら目につく色野菜
鍛へあげ築きあげての競べ馬

竹村淳

鹿威し箕のしづく苔光る
カタカナも漢字の花も夏花壇
竈馬古墳の中で見付けたり
漁火に涼しき星の水平線
俯きて螢袋は螢見ず

田中信行

断捨離の果ての西行夏の月
夕焼や心の旅路停車駅
大花火フリーフォールの火の粉かな
ペンギンと夏の孤独を分かち合ふ
踏夏の高校野球百回記念大会みしめる甲子きのえねの土夏の土

槐集

高橋将夫選

子の付けし柱の傷を出水越す 守口 三木 亨

不知火やをみな怒りすぐ飛び火
稲妻にびくりと動く膝枕

西瓜食ぶ女は牡を喰ふ如く

取り落とすインク壕割れ秋の色

見通せるところへ門火焚きにけり 大阪 平野 多聞

十方を照らす月にも陰一つ

長老と言はれてひるむ白緋

核を抱く真珠の海や広島忌

きな臭い献花や八月十五日

万緑やこの身一つを解き放つ 藤田美耶子

勝者敗者の傷癒えぬまま終戦日

しがらみを解けばうそ寒ちぎれ雲

コロンひと吹き働く人の顔となる

薔薇崩れ風音生るピアニシモ

戦ひを不思議と思ふ終戦日 大阪 江島 照美

真つ黒な背ナの輝き夏終る

墓洗ふ御破算にする親不幸

進化する心と身体生身魂

紅蓮の縁を彩る紅の濃さ

一片の雲なき空や紫苑晴 枚方 中 貞子

どの木にも性根のありて松手入

五位鷺のけふも眺むる青瓢

天上畑の空に続けり曼珠沙華

竜笛の流れに乗りし赤蜻蛉

いま明かすあの日のことや氷水 芦屋 田中 信行

コンドルも鷲鳥となりし猛暑かな

立ち位置に夏のトナカイ悩みけり

14 は 永久欠番終戦忌

盆明けや社長の顔をして出勤す

銀河往來

◆槐集觀照

子の付けし柱の傷を出水越す 三木 亨
洪水の浸水の高さが「子の付けた柱の傷」を越えたという着眼に心を打たれた。「柱の傷はおとしの……」という童謡が少しは被災の心の傷を癒してくれよう。

〈不知火やをみな怒りすぐ飛び火〉と〈西瓜食ぶ女は牡を喰ふ如く〉の句は大胆かつユーモラスに女性の本質に迫っている。

〈稲妻にびくりと動く藤枕〉と〈取り落とすインク壕割れ秋の色〉は作者が繊細な感性も持ち合わせていることを窺わせるに充分であろう。

見通せるところへ門火焚きにけり 平野 多聞
「見通せるところへ」という心遣いに共感した。作者は社交ダンスの会の会長。さすが気配りに遺漏がない。

〈十方を照らす月にも陰一つ〉と〈核を抱く真珠の海や広島〉も着眼が素晴らしい。核心をとらえている。

万緑やこの身一つを解き放つ 藤田美耶子
万緑の中で解放感がストリートに伝わってくる。

〈勝者敗者の傷癒えぬまま終戦日〉の句 戦争は勝者にも敗者にも傷を残す。

〈コロンびと吹き働く人の顔となる〉の句、仕事に出かける時に気合を入れるのはなにも男だけではないようだ。

戦ひを不思議と思ふ終戦日 江島 照美
人間はどうして戦争をするんだろうか。理由はいろいろあるのだろうが、少なくともこの感覚が麻痺したら人類は終わる。
〈墓洗ふ御破算にする親不幸〉の句、墓を洗って親不幸を御破算にというあたり、なんとも憎めない性格。

どの木にも性根のありて松手入れ 中 貞子
松の手入れをしながら、庭師は「この松なかなか性根が坐っている」などと思っているのかもしれない。
〈竜笛の流れに乗りし赤蜻蛉〉は秋らしい」句。

立ち位置に夏のトナカイ悩みけり 田中 信行
「クリスマスでもないのにどうして」とトナカイが戸惑っている。場違いなところに置かれ戸惑った経験は誰にでもあるのではなからうか。

〈いま明かすあの日のことや氷水〉の句、氷解とはまさにこういうこと。〈コンドルも鷲鳥となりし猛暑かな〉は俳諧。

流星にゆさぶられぬる心かな 柴田 靖子
悪い予感か、吉兆か心がゆらぐ流れ星。

愛深き人装ひて金魚飼ふ 久保 夢女
装うと言いながら、本当は愛が深い謙虚な作者。

〈鶉茂る此の家の記憶守るがに〉の句 茂った鶉をそんな風に見るところがいかにこの作者らしい。